

女子美術大学アート・デザイン表現学科 3年次・選択

メディアクリエーション演習 (金曜日特別授業)

実体論から関係論へ～「言語論的転回」をめぐって

(講義第4回：2016-12-02)

担当： 石井 拓洋
takuyo.ishii@gmail.com

2016

【資料内の表記について】

- ・「」内は著作物からの引用
- ・〈〉内は専門用語、一般用語、語の強調。
- ・※印以下の記述は、石井の考えを多く含むもの
- ・[]内は、石井による補足

藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 藝術文化研究での 基本的視座

「20世紀の 知の 最大の変革 は、
物事を『実体』ではなく、『関係』として認識しようとすることです」

(小林康夫、船曳建夫編 『知の技法』1994年、102頁。)

実体論 から 関係論 へ
substantialism relationalism

藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 藝術文化研究での 基本的視座

「20世紀の知の最大の変革は、
物事を『実体』ではなく、『関係』として認識しようとすることです」

(小林康夫、船曳建夫編 『知の技法』1994年、102頁。)

問いの方向性

「インタラクティブアートの本質とは何か？」 というよりも (実体論, 本質主義, など)

「今日の日本の一部では、なぜ そのアート が注目されるのか？」 (関係論, 構築主義)

〈関係論〉に先立つ〈実体論〉とは？

- ・ 〈実体〉 substance とは

「(哲) 変化する諸性質の根底にある持続的な担い手と考えられるもの。

それ自身によって存在するもの。

世界ないし事物の実体は古来哲学の重要問題とされ、殊にギリシャ哲学・スコラ哲学・デカルト・スピノザにおいて中心的役割を演じた。

〔略〕 現在では、実体ではなく関係を事物の根底に据える考え方が盛ん

になっている」

〈実体論〉 realism のルーツ

- ・ プラトンの〈イデア〉論 (= 実体論) と、その藝術批判

- ・ 「寝椅子」の〈イデア〉 = 「寝椅子」の実体、本質 (神が創造したもの)



- ・ 「寝椅子」の〈イデア〉の模倣 = 現実に存在する具体的な「寝椅子」(職人による)



- ・ 『「寝椅子」の〈イデア〉の模倣』の模倣 = 現実の「寝椅子」を描いた絵(画家による)

藝術 (= 模倣の術) は、〈イデア〉の模倣の模倣。
なので、本質(イデア)から遠いものであり、まやかしである。

〈自律美学〉の徹底としての〈形式主義〉へ

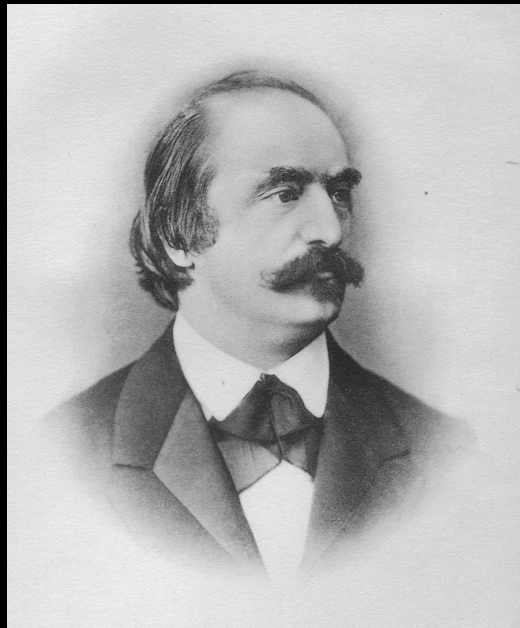
～ 美の〈実体〉 (=本質) をめぐる近代主義的探究

表現における 美的自律性と 人間的感情の排除

エドゥアルト・ハンスリック Eduard Hanslick (1825-1904, ウィーンの音楽批評家)

「音楽の内容は響きつつ動く形式である」

(ハンスリック, 76)

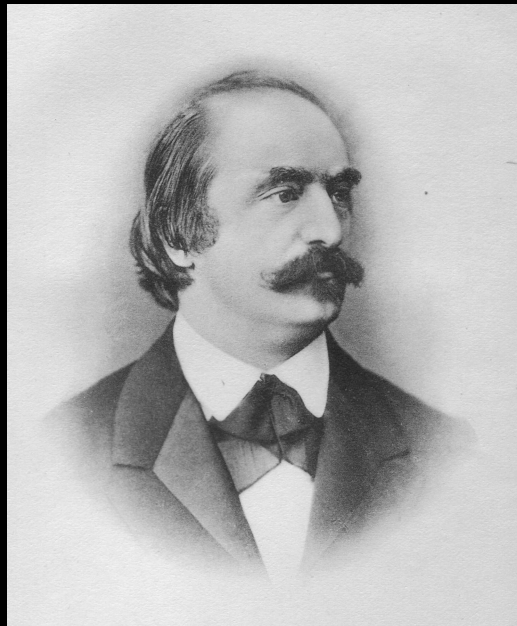


画像: <http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/fe/Hanslick.jpg>

エドゥアルト・ハンスリック Eduard Hanslick (1825-1904, ウィーンの音楽批評家)

「音楽の内容は響きつつ動く形式である」

(ハンスリック, 76)



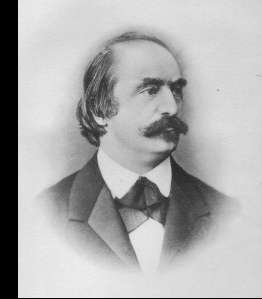
画像: <http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/fe/Hanslick.jpg>

- ・「内容」 content ↔ 「形式」 form
- ・「内容」
作品内のテーマ、感情、物語、思想など。
- ・「形式」
作品を構成する物理的な要素。「内容」以外。
音楽では音響、音型、構成など。
絵画では色、線、マチエール、構成など。
作品における「内容」の入れもの。

エドゥアルト・ハンスリック Eduard Hanslick (1825-1904 , ウィーンの音楽批評家)

音楽の 「形式主義」 formalism の美学

絶対音楽の器楽優位の思想を、フォルムの側面から学的厳密さをもって理論づけようとした (国安 132)。

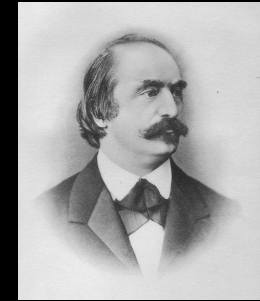


画像 : <http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/fe/Hanslick.jpg>

エドゥアルト・ハンスリック Eduard Hanslick (1825-1904, ウィーンの音楽批評家)

音楽の「形式主義」 formalism の美学

絶対音楽の器楽優位の思想を、フォルムの側面から学的厳密さをもって理論づけようとした(国安 132)。



画像: <http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/f/fe/Hanslick.jpg>

・〈感情表現〉は音楽において不純なものと考えた

- 音楽の目的は感情表現ではない (⇔ バロック音楽 と対照的)

・〈文学性〉など、音楽に外から加わる全ての「内容」を排除すべしとした

- 「詩と音楽または詩とオペラとの結合は身分違いの結婚である」(ハンスリック, 73)

- だから、ハンスリックは、ヴァーグナー(詩と音楽との融合を志向した人)が大嫌い

- ブラームスが好き

- 人間による歌より、器楽音楽を賞揚

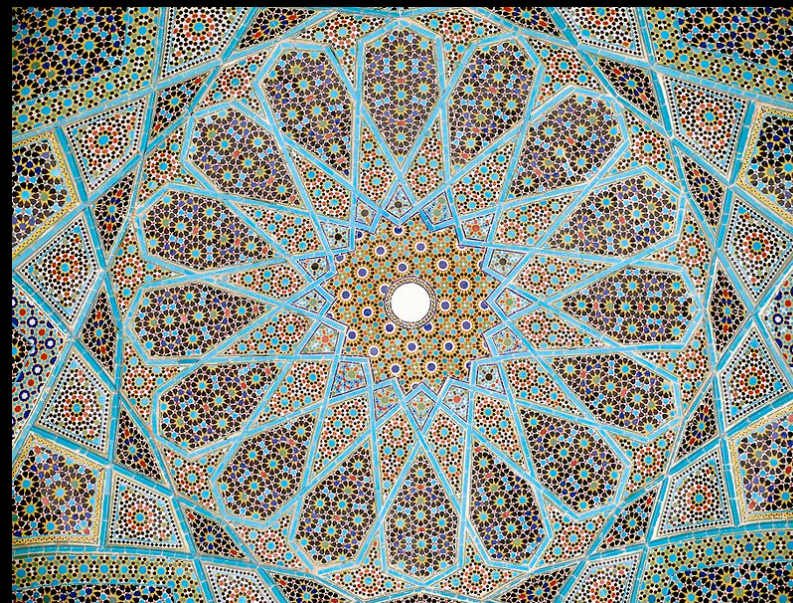
・音楽の「内容」とは、その音響構造や技法(=「形式」)の内部からうまれる

- 「音楽の内容は響きつつ動く形式である」(ハンスリック, 73)

アラビア風唐草模様 arabesque



© Alfred Molon www.molon.de




http://en.wikipedia.org/wiki/Tomb_of_Hafez

The Tomb of Hafez @ イラン
(中世イランの詩人・ハーフェズの墓の天井模様)



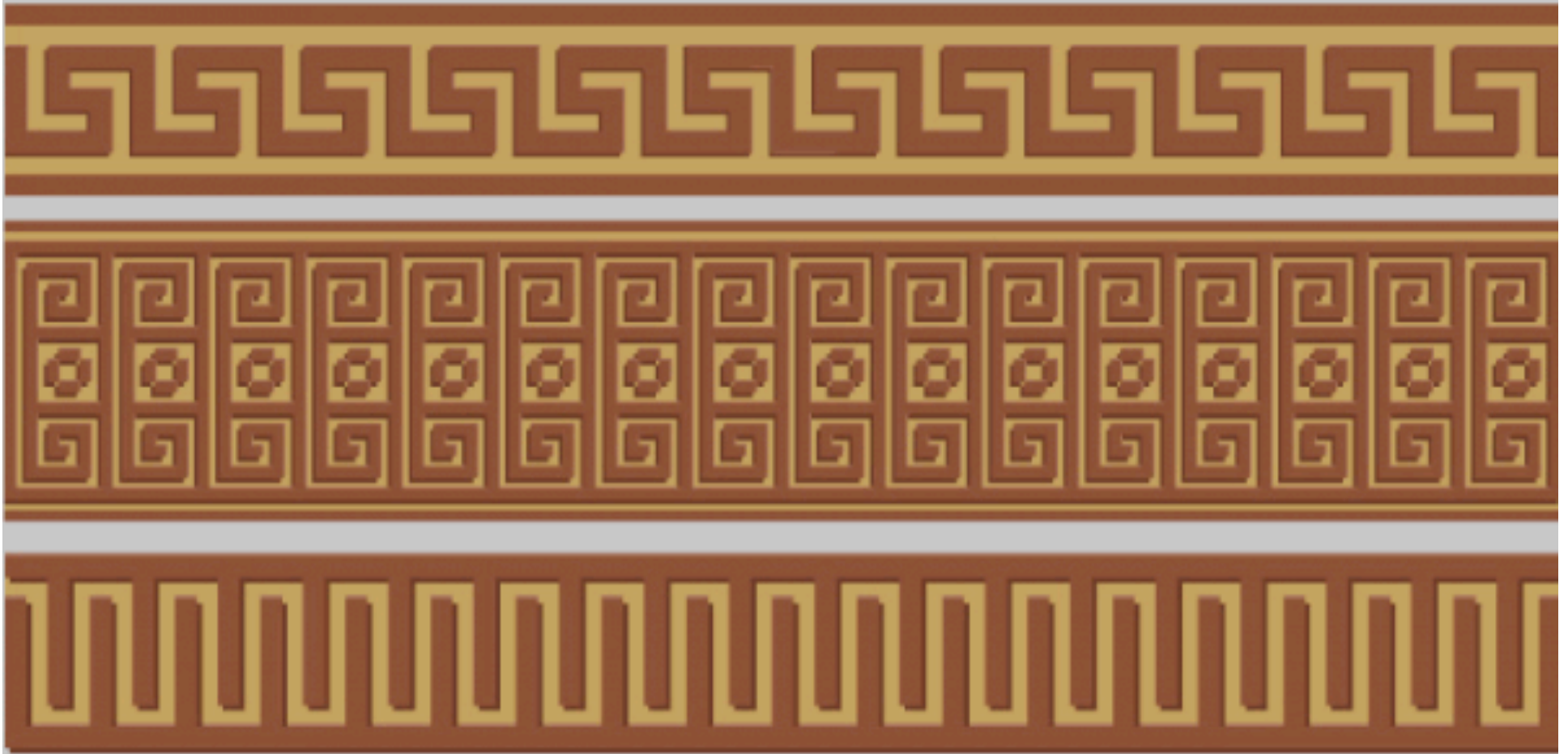
http://en.wikipedia.org/wiki/Tomb_of_Hafez

The Tomb of Hafez @ イラン
(中世イランの詩人・ハーフェズの墓の天井模様)



「音楽が一定の情緒の内容なしに
いかにして美的形式をもたらすことができるかは、
かけはなれたことではあるが
すでに造形芸術の装飾の一種がこれを我々に示してくれる。
すなわちアラベスクがこれである」

(ハンスリック, 76) 1854年



ギリシャ風の線描模様（雷文）

<http://orname.net/2011/11/16/the-greek-ornament-%E2%80%93-meander-part-1/>

カント：「形式主義」美学のルーツ

「ギリシャ風の線描的模様、、、などは、それ自体だけでは
なんの意味ももつものではない。

このような物は、、、一定の概念によって規定されているような
いかなる対象をも標示するのではなくて、、、自由な美なのである。

また音楽において、、、およそ歌詞をもたない楽曲をも、
この種の美の中へ加えてよい」

(カント 『判断力批判(上)』 117) 1790年

19世紀末～20世紀半ばにおける絵画の〈形式〉化
：クレメント・グリーンバーグについて

クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg

(1909-1994, アメリカの美術批評家)

「平面性、二次元性は、絵画が他の芸術と分ち合っていない唯一の条件だったので、それゆえモダニズムの絵画は、他には何もしなかったと言えるほど平面性へと向かったのである。」

(グリーンバーグ「モダニズムの絵画」、『グリーンバーグ批評選集』藤枝晃雄訳、勁草書房、1960年=2005年、65頁より)



画像 : <http://jonfinearts.com/ModernismEssay2.html>

クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg

(1909-1994, アメリカの美術批評家)

【彼の主張】

- ・ かつてそうであったように、絵画は崇高であるべきである。
- ・ しかし、近代以降、それは「たんなる娯楽となって、質が低下していった」
- ・ 絵画の危機を救うために、〈絵画固有の要素〉を明確にするべきである。
- ・ 三次元性や色は彫刻に固有な要素である。物語性は文学に固有である。
- ・ なので、全ての三次元性(イリュージョン)は絵画の本質ではない。人物・神話も不要。
- ・ 二次元性、つまり「平面性」、そのような「形式」こそが〈絵画固有の要素〉である。
- ・ 絵画は「平面性」を追求すべし。過去の名作の水準を維持するために。

ウィリアム・アトルフ・ブダロー(1825-1905,フランス,アカデミズム絵画)



“Work Interrupted” (1891)

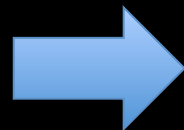


《2人の姉妹》(1901)

「印象派の時代」と認識されがちな時代だが、しかし、やはり「アカデミズム絵画」の影響力が大きかった時代



ディエゴ・ベラスケス (スペイン)
《マルガリータ王女》(1659)



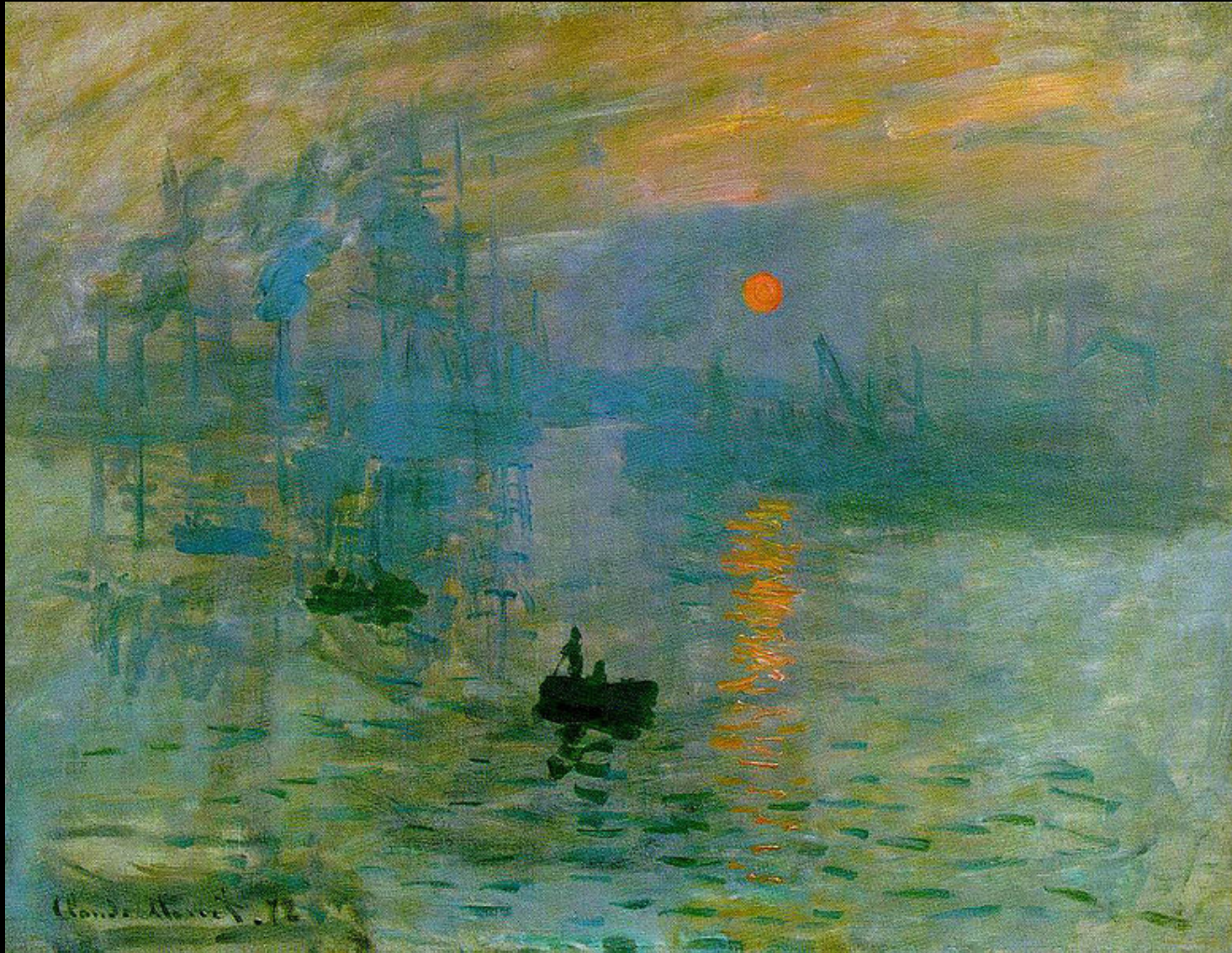
ブグロー (当時の仏の巨匠)
“Psyche” (1892)
230年後? 進歩主義的には = ?

写真の誕生（「ダゲレオタイプ」 1839年に発表）



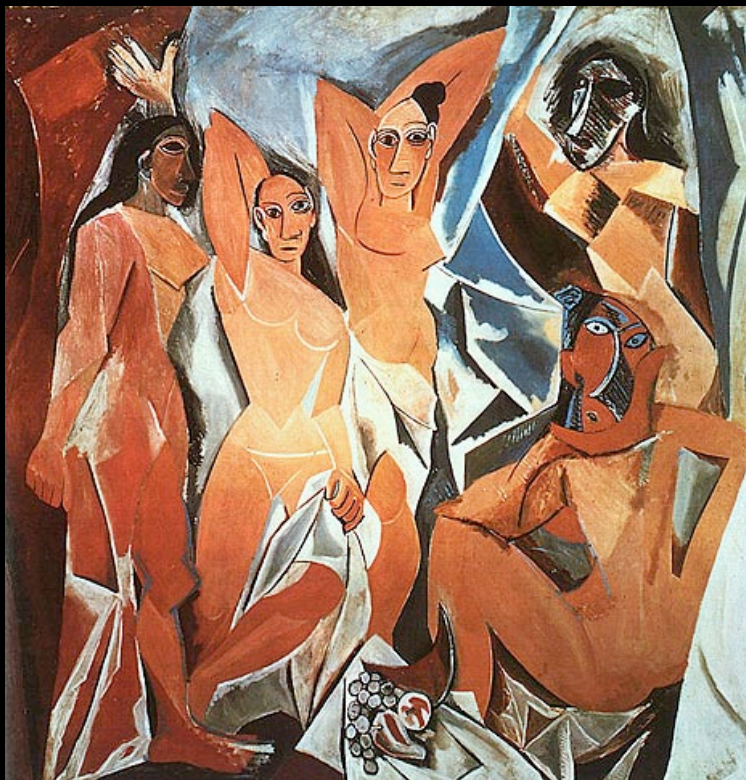
ルイ・ジャック・マンデ・ダゲール 《ダゲールのアトリエ》(1838)

現象の忠実な描写は、絵画よりも写真が担うようになった。
したがって、以降、20世紀後半まで、絵画はそれ固有の表現こそが希求されることになる。

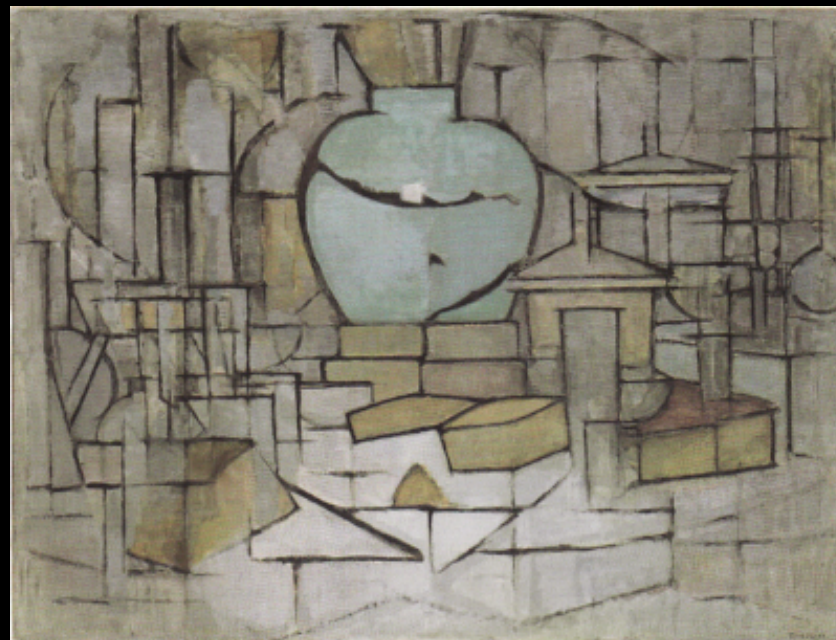


クロード・モネ 《印象－日の出》(1872)

絵画固有の価値の追求が見られる。
「内容」(描画対象やその情緒)や
空間的「イリュージョン」が中途半端に存在？



ピカソ 《アビニヨンの娘たち》(1907)



モンドリアン 《ショウガの壺のある静物2》(1912)

さらに、絵画固有の価値の追求が見られる。
一方、「内容」(描画対象)やバールによる
絵画的な「イリュージョン」が中途半端に存在するとも。
要素還元主義・進歩主義的には = ?

クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg

(1909-1994, アメリカの美術批評家)

「平面性、二次元性は、絵画が他の芸術と分ち合っていない
唯一の条件だったので、それゆえモダニズムの絵画は、
他には何もしなかったと言えるほど平面性へと向かった
のである。」

(グリーンバーグ「モダニズムの絵画」、『グリーンバーグ批評選集』藤枝晃雄訳、
勁草書房、1960年=2005年、65頁より)



画像 : <http://jonfinearts.com/ModernismEssay2.html>



所蔵資料を検索

検索



検索結果詳細：図書

検索条件入力 > 検索結果一覧 > 検索結果詳細

◀ 前へ 次へ ▶ 1 / 1件

グリーンバーグ批評選集



グリーンバーグ ヒヒョウ センシュウ

C.グリーンバーグ著；藤枝晃雄編訳；上田高弘 [ほか] 訳

東京：勁草書房，2005.4

[Amazon.co.jpで詳細を見る](#)

ブックマーク

●所蔵：

🔍	巻号	刷年	所在	請求記号	資料ID	状況	予約・取寄	予約人数	備考
1 <input type="checkbox"/>			相図：開架	704 G82	12048516		<input type="button" value="予約"/>	0	
			芸術文化	704 G82	12084684				

全て選択

選択解除

巻号ブックマーク

クレメント・グリーンバーグ Clement Greenberg

(1909-1994, アメリカの美術批評家)

絵画は、その固有の形式的要素「平面性」を自己批判的に追求すべし。



「メディアウム・スペシフィシティ」

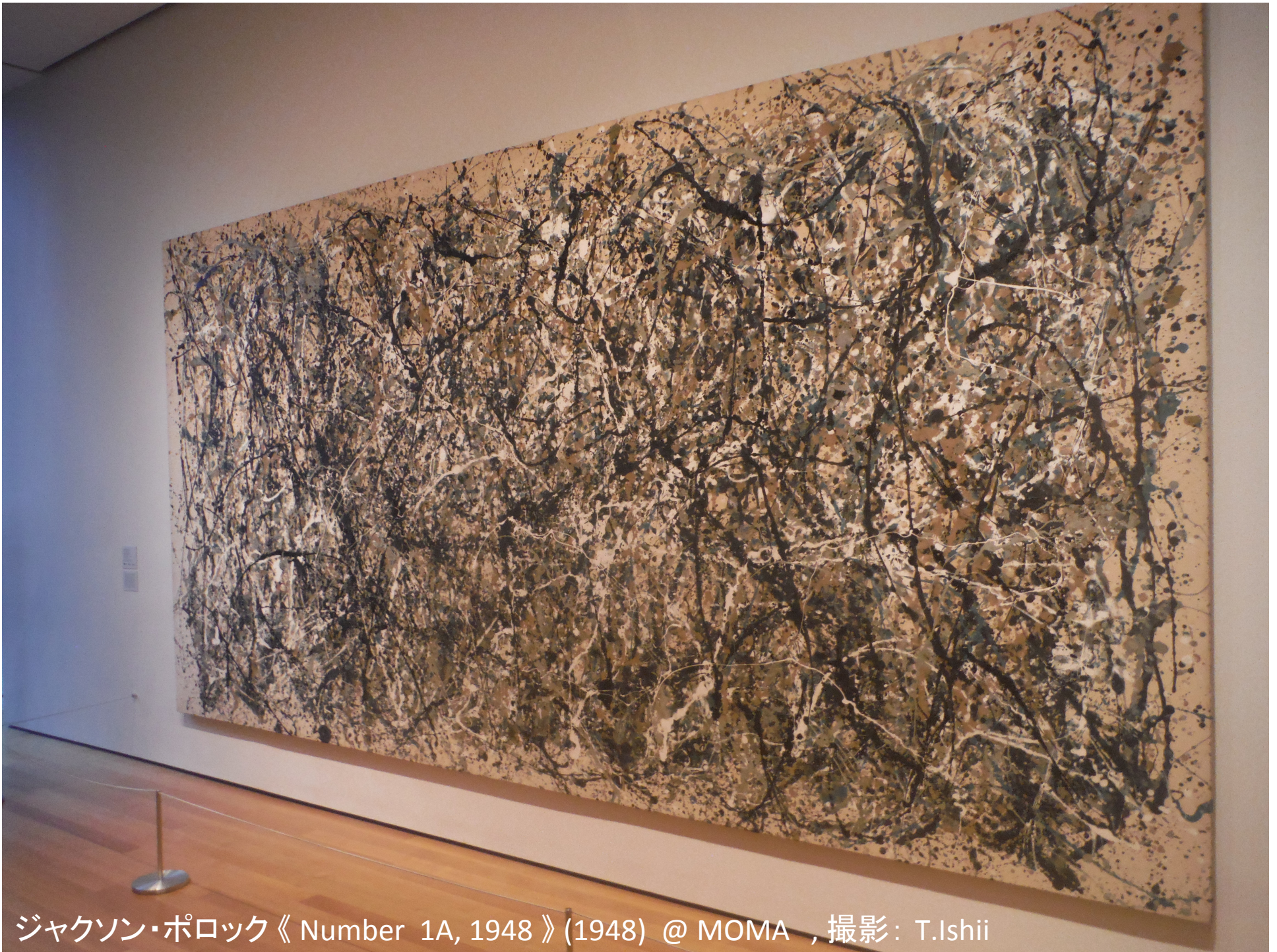
Medium Specificity ※媒体特性

「素材や媒体に固有の性質のことを示す美学／批評用語。

モダニズムの美術批評の理論的展開において重視され、

特に批評家、C・グリーンバーグの言説によって広まった」

(Web『アートワード, 現代美術用語辞典 ver.2.0』より)



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 (1948) @ MOMA , 撮影: T.Ishii



ジャクソン・ポロック 《 Number 1A, 1948 》 (1948) @ MOMA, 撮影: T.Ishii



バーネット・ニューマン 《崇高にして英雄的なる人》 1950-51年 (242.9 × 542.0 cm)

「抽象表現主義」 > 「カラーフィールド・ペインティング」 ('50s頃) の例



ジュールズ・オリツキー
“END RUN “ (1967)



ジュールズ・オリツキー
“BEAUTY MOUTH-TWENTY FOUR “ (1972)

※ グリーンバーグからの評価が高かった作家

自律美学的、形式主義的「近代藝術」の帰趨

近代藝術の帰結（絵画篇）



ロバート・ラウシェンバーグ
《白い絵画》1951

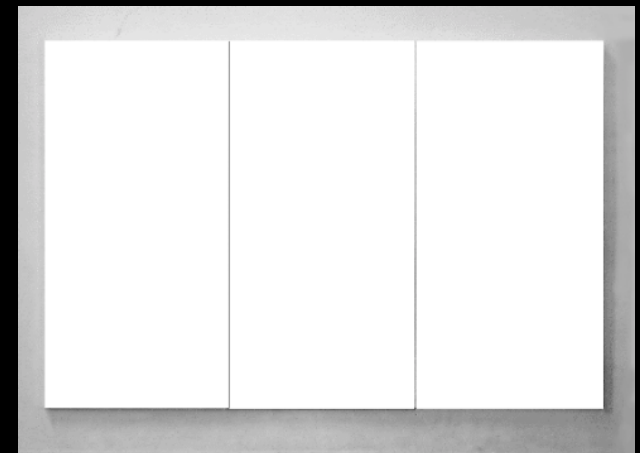
<http://canonpluscanon.wordpress.com/2010/03/09/robert-rauschenberg-white-paintings/>

近代藝術の帰結（音楽篇）

「私に **4分33秒** の作曲させたのは、
無響室での体験と、
ロバート・ラウシェンバーグの
《 white painting 》だった」

ジョン・ケージ『自叙伝』(1989)より

http://johncage.org/autobiographical_statement.html



近代藝術の帰結（音楽篇）

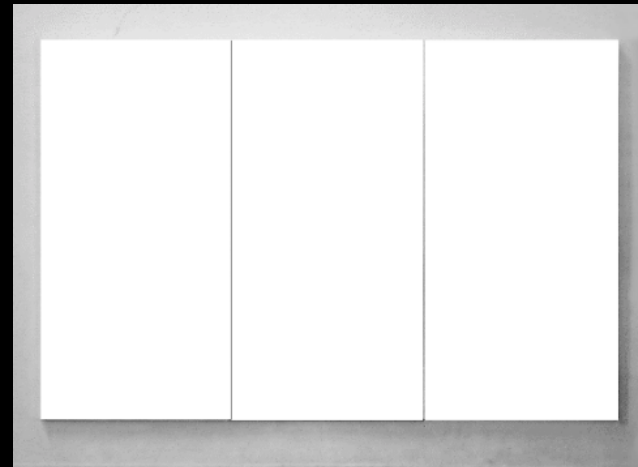


ジョン・ケージ《4分33秒》(1952)

(※ いわば 純化の極地、〈音のない音楽〉)

- ・ 3楽章形式
- ・ 第1楽章を33秒、第2楽章を2分40秒、第3楽章を1分20秒
- ・ 楽章間に休みがある
- ・ 合計時間4分33秒で〈演奏〉する。

近代藝術の帰結



啓蒙主義に導かれ、

「要素還元主義」、「進歩主義」を、真摯に可能なかぎり、突き詰めた結果、
音楽に音が無くなり、そして絵画は色と形が無くなり「モノ」となった。

これ以降、還元や進歩を追究する余地を失い、行き詰まる。

【ここまでのまとめ】 (1/2)

こうして、近代主義的な「藝術」（自律的、形式主義的）は、その理念を、「啓蒙主義」的に、真摯に希求すればするほど、行き詰まりをみせることになった。

近代的理念の純粹なる追究の果てに、

音楽に音がなくなり、絵画に色と形がなくなった。

ならば、その純粹なる「形式主義」的な表現、それ自体から、

われわれは、一体、〈新たなる内容〉を看取しうるものなのだろうか？

つまり、「内容」（意味）とは、そもそも、それが生まれる様々なコンテクスト（背景・文脈）によって生まれ、それが、長い経験の内にわれわれの中で沈殿し、することによって、意味を伴う「形式」となるものではないか。

【ここまでのまとめ】(2/2)

今回の講義で検討した〈インタラクティブであってはならない藝術〉 = 自律藝術を、ここで、〈実体論〉的藝術と言い換えるならば、

このような藝術の系譜(「モダンアート」の系譜)は、20世紀の半ばごろ(1960~70)で、その内在する性質ゆえに、行き詰まることとなった。

したがって、この時期以来、われわれは、かかる藝術を生む思想的背景としての世界観、つまり、西欧近代主義を土壌として生まれた〈実体論〉的な世界観を批判的にとらえ直しながら、あらたな活路を見い出さねばならなくなったのである。その一つの活路が〈関係論〉的な認識への転回であった。

藝術文化研究のための「視点」の設定

- ・ 藝術文化研究での 基本的視座

「20世紀の知の最大の変革は、
物事を『実体』ではなく、『関係』として認識しようとすることです」

(小林康夫、船曳建夫編『知の技法』1994年、102頁。)

実体論 から 関係論 へ

substantialism

relationalism

(本講義 第1回スライドより)

関係論 ・ 関係主義 relationalism

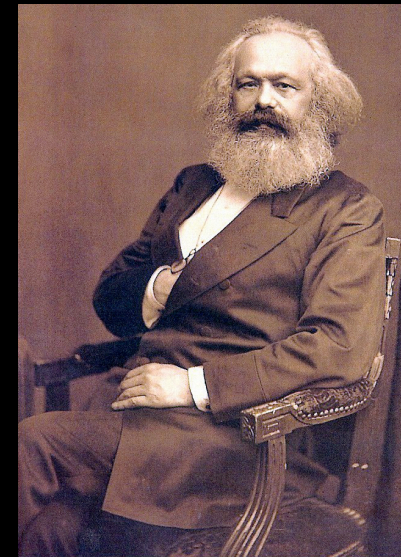
- ・ 「西洋哲学の伝統的存在観においては、独立自存する〈実体〉がまずあり、次いで実体どうしの中に〈関係〉が二次的に成立すると考えられてきた。それに対して、関係こそが第一次的な存在であり、実体は〈関係の結節〉にすぎないとする立場が〈関係主義〉である」

(野家啓一 「関係」 『岩波哲学・思想事典』 278 頁)

〈関係論〉を導いた視点

関係論をみちびく視点（前史）

カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)



public domain

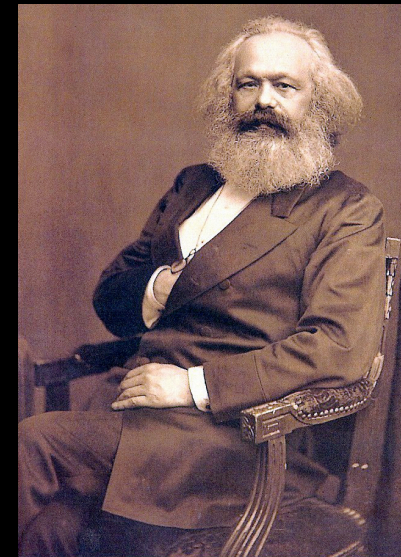
関係論をみちびく視点（前史）

カール・マルクス Karl Marx (1818-1883、独)

「物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的生活諸過程一般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定するのである」

(マルクス「序言」『経済学批判』武田隆夫他訳、岩波文庫、1859 = 1956、13頁)

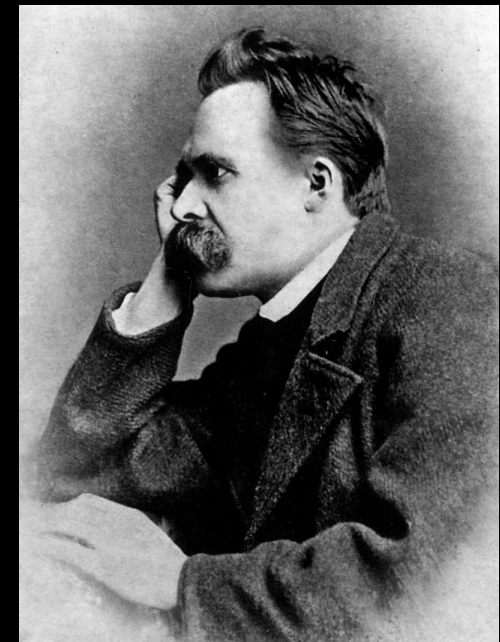
→ 経済的基盤（「土台」）に従って
社会や文化（「上部構造」）の在り方が変化する
（「史的唯物論」）



public domain

関係論をみちびく視点（前史）

フリードリヒ・ニーチェ F· Nietzsche (1844-1900、独)



public domain

関係論をみちびく視点（前史）

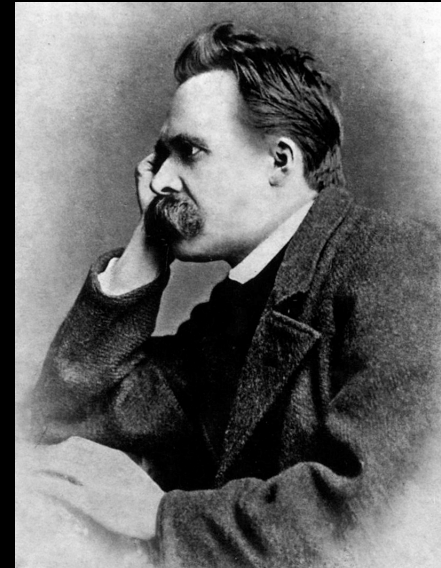
フリードリヒ・ニーチェ F· Nietzsche (1844-1900、独)

- ・〈神の死〉 = ※ 実体としての善悪の基準を批判

- 「悪」とされるものとは、弱者が強者に抱く「ルサンチマン」(ねたみ) にすぎない
- 弱者は「悪」の対照的なものとして「善」を導く
- キリスト教の教えとはこのようなもの

- ・〈力への意志〉 = ※ 関係論的な視座のあらわれ

- 健全なる人、強者は、自身の力の最大化につとめる
- 「力の最大化」への希求が全てである。善も悪もない。
- 現状とは、社会での〈力への意志〉の均衡状態の一コマ



public domain

「19世紀から20世紀への転回点 (1890年代から1910年代) において、**ソシュール**や**パース**が提唱した**記号の学**や、のちに**構造主義**と呼ばれることになる**知の運動**が行った**第一のことは、近代科学の実体論的な認識から関係論的な認識への転換でした**」

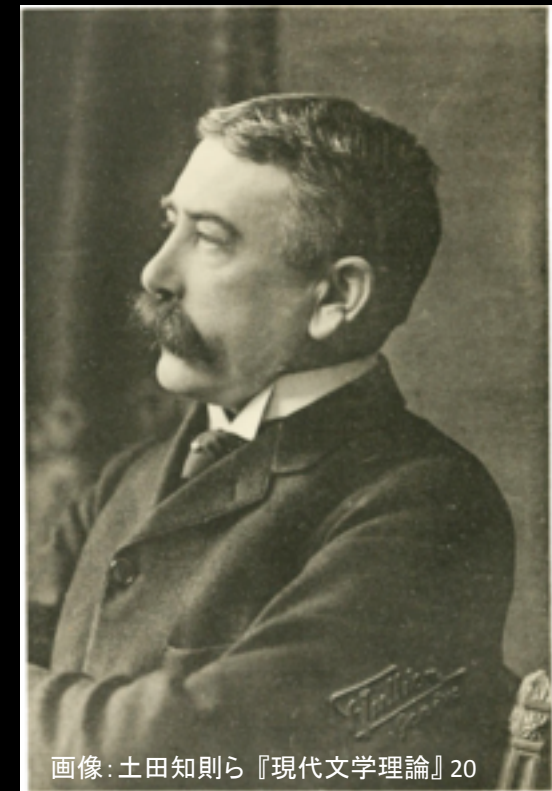
(石田英敬 『記号の知／メディアの知：日常生活批判のためのレッスン』 29頁)

「**ソシュール**の**記号学**は**世界の見方**を**実体論**から**関係論**へと**シフト**させたのであり、**世界は実体**であることをやめ、**記号**が織り成す一つの**体系 = 構造**として考えられるようになった」

(桑野光平 「ロラン・バルトの批評」 大橋洋一編 『現代批評理論のすべて』 56頁)

関係論をみちびく視点 1 : 外界の関係論的な認識へ

F・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913、瑞、スイス)



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

関係論をみちびく視点 1 : 外界の関係論的な認識へ

関係論をみちびく視点 1 : 外界の関係論的な認識へ

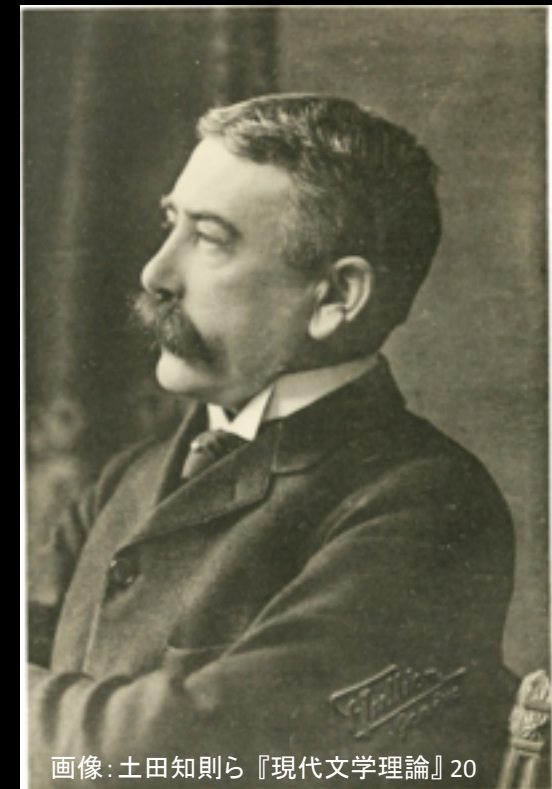
F・D・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913、瑞、スイス)

- ・ 言語学者 , 「近代言語学の父」, 記号論、構造主義思想の端緒
- ・ 「ことば」は 実在する物事を指す代用の記号ではなくて、むしろ「ことば」によって、人間は物事の認識を得るとの世界認識を示した。



「言語論的転回」 Linguistic turn

20世紀最大の 人文科学上の パラダイムシフト



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

ソシユール以前の考え方
「言語名称目録観」

「貸し」という
概念が先に存在して、、、



あとで「貸し」
という言葉がうまれた

「言語名称目録観」

「借り」という
概念が先に存在して、、、



あとで「借り」
という言葉がうまれた

「言語名称目録観」

でも本当なのか？

「貸し」や「借り」の概念とは、
言葉に先立って存在するといえるのか？

「貸し」概念



日本語 : 貸し

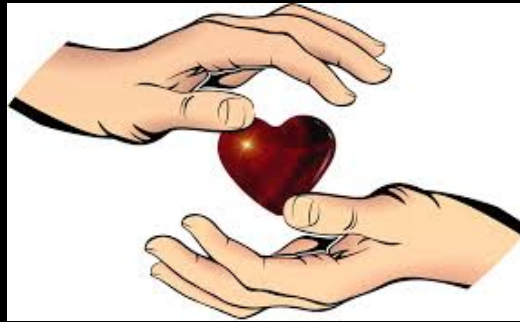
ドイツ語 : mieten

フランス語 : louer

ミッテン

ルウイ

「借り」概念



日本語 : 借り

ドイツ語 : vermieten

フランス語 : louer

ファーミッテン

ルウィ

「もし語というものが、

あらかじめ与えられた概念を表出する役目を受け持ったものであるならば、

それらはいずれも 意味上精密に対応するものを、言語ごとにもつはずである。

ところが 事実はそうではない。

フランス語は『借りる』ことをも『貸す』ことをも 無差別に louer (ルウイ) という。

ドイツ語ならば mieten および vermieten と 言い分けるところである；

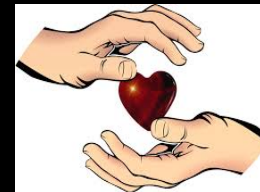
それゆえ 価値の精密な対応はない」

F・ソシュール 『一般言語学講義』小林英夫訳、東京：岩波書店、1940年、163頁。



日本語 : 貸し
ドイツ語 : mieten

フランス語 : louer



日本語 : 借り
ドイツ語 : vermieten

フランス語 : louer

もしも、「貸し」や「借り」などの「行為それ自体」が、
たしかに、言葉に先立って存在するのであれば、

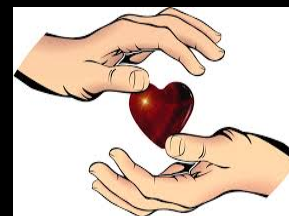
それらを、それぞれ、「違うもの」として示すために、必ず「違うラベル」が付されるはずで
ある。しかし、国によっては、同じであったりする（「貸し」-「借り」のフランス語のように）。

なので、「物事それ自体」が言葉に先行して存在しているとは言えなくなる。

= 「言語名称目録観」の否定



日本語 : 貸し
ドイツ語 : mieten
フランス語 : louer

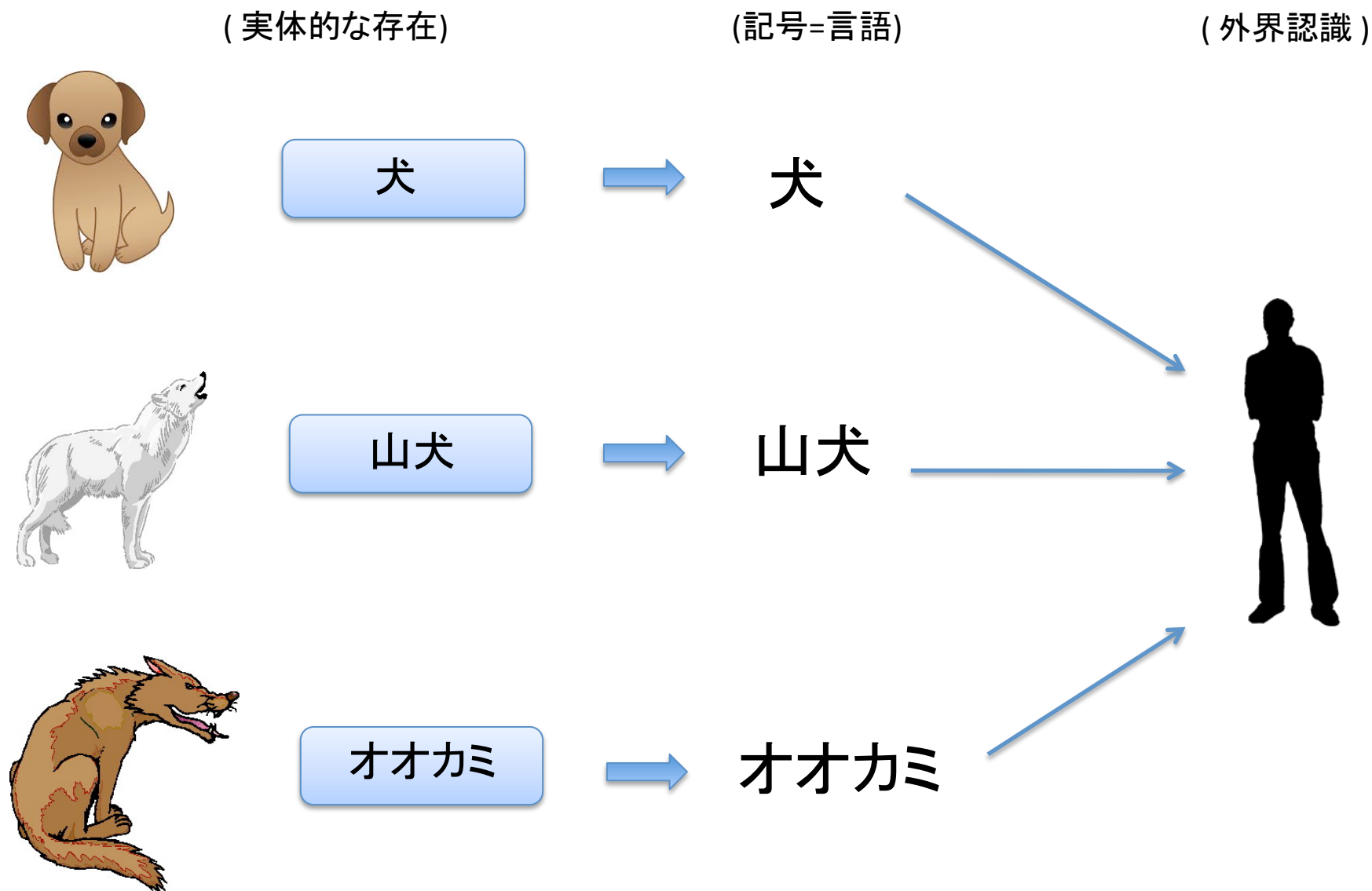


日本語 : 借り
ドイツ語 : vermieten
フランス語 : louer

「言語名称目録観」

ソシユール以前の外界認識モデル

最初に物などが存在する。
人は物にラベルをつける。
それによって外界を認識する



さらに

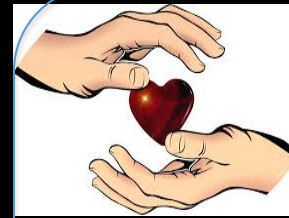
ここから言えることは、例えば、フランス人にとっては、「貸し」も「借り」が個別に存在しているのではなくて、両者は同じ行為に思えた、ということではないか。

つまり、「貸し」や「借り」の区別して、それぞれを別個の概念を作り上げるのは、言語と考えることも可能。

フランス語 : louer



日本語 : 貸し
ドイツ語 : mieten



日本語 : 借り
ドイツ語 : vermieten

ソシユール以後の考え方 「言語論的転回」

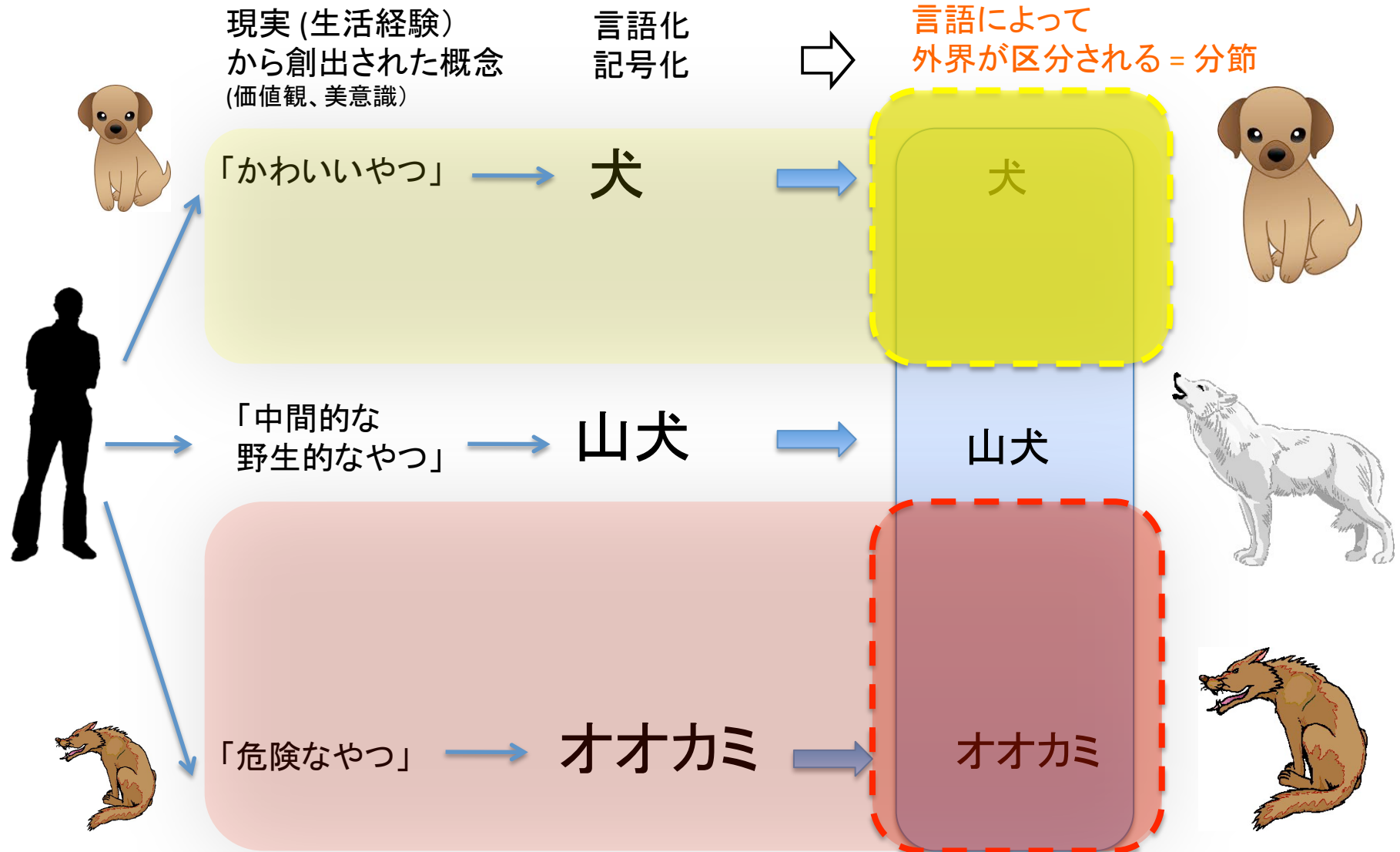
外界に存在する物事に対する命名によって言語がうまれたというよりも、むしろ、最初に言語ありきであり、言語こそが、人間にとっての外界認識をつくる、

という、世界認識方法の転回（20世紀はじめ = ソシユールによる）

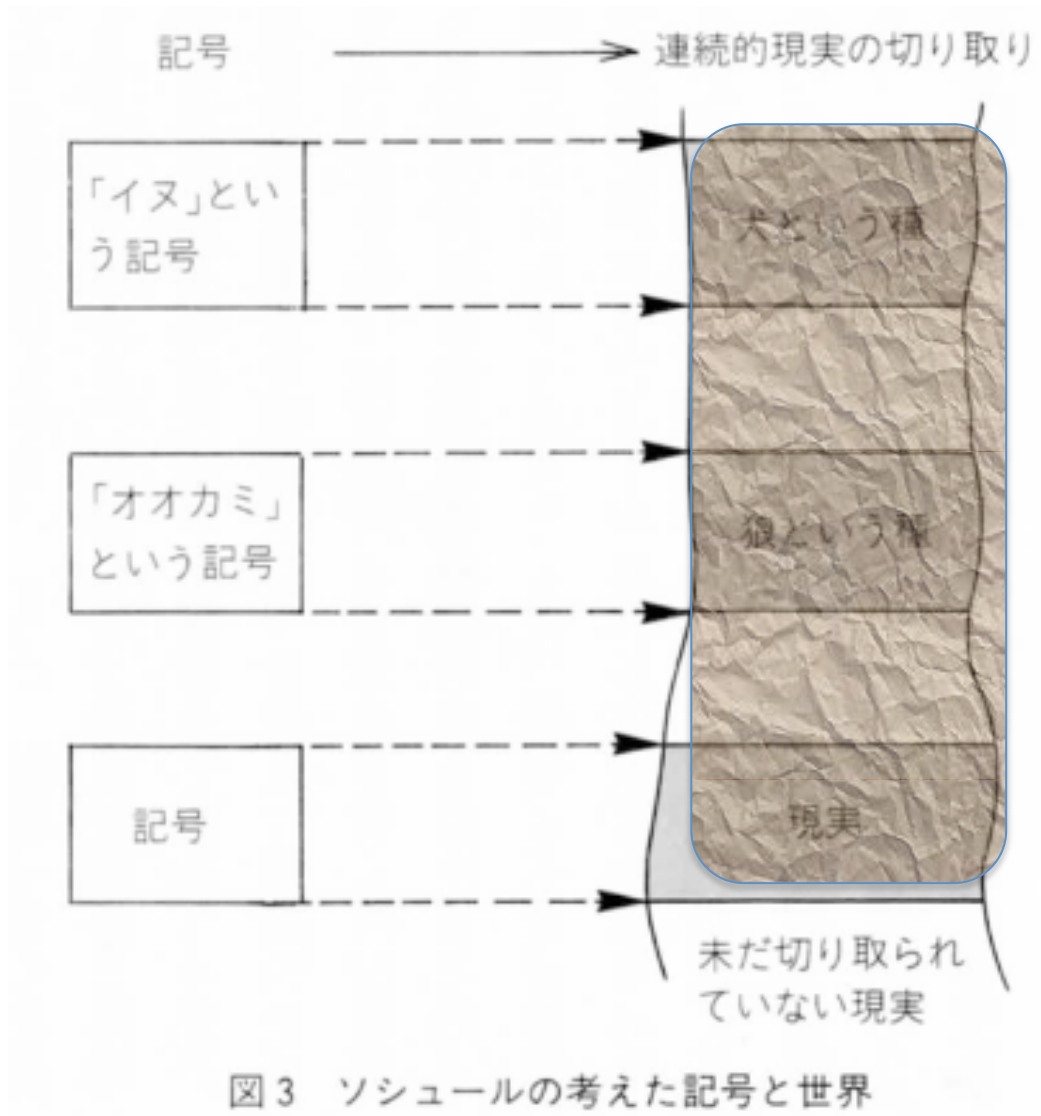
「言語論的転回」

ソシュール以後の外界認識モデル，記号論の視点

人の価値観に基づいて
本来は〈区分別のない〉外界を
記号を用いて〈区分別する〉。
そして外界を認識する。

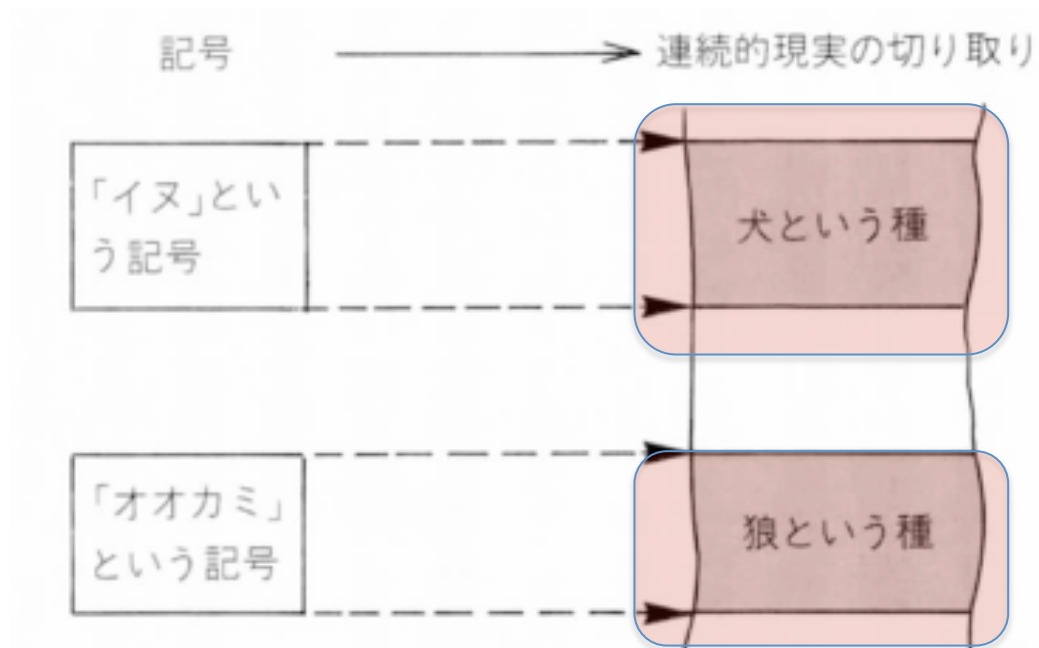


「分節」のはなし



〈イヌ〉的な生物種の
連続したつながり

本来、自然には
このような連続した
種をつながりしか
存在しないはず



連続した連なりの一部を
 「犬」などの **記号を用いて**
区分することで、
 「犬」の認識がうまれる。

価値観によって外界は区分される
 「分節」

図3 ソシュールの考えた「分節」

言語は
関係性（差異）のみによって
成り立つ

言葉「犬」

と

これ



とのつながりは？

表現記号
シニフィアン

表現内容
シニフィエ

言語 「犬」
イヌ

と

これ



とのつながりは？

まったく必然性はない（恣意的である）。
なぜなら、地域ごとに様々な〈つながり〉方が存在するから。

表現記号 dog (英) , chien (仏) , hund (独) , cane (伊) , собака (露)

ドッグ

シアン

フント

カーネ

サバーカ

表現内容



表現記号(シニフィアン)と 表現内容(シニフィエ) とのつながりは「恣意的」である。

そしてまた、

ほかならぬ 「いぬ」 という言葉の「音」を示すためには？

ほかならぬ  という「概念」を 示すためには？

音の差異

概念の差異

「いす」×

「いと」×

「きぬ」×

「いぬ」

「いに」×

「しぬ」×



これではなく



これ

「シニフィエ」
記号内容



これでもなく

「シニフィアン」
記号表現

言葉においては
「音」も「概念」も 他との関係による「差異」によってしか示すことができない

「言語とは差異の体系である」



図

地

図が存在するためには
図ではないもの (地) が必要

図 (?)

地がなければ (図としての差異をつくるものがなければ) 、
図は図として存在できない

関係論をみちびく視点 1 : 外界の関係論的な認識へ

F・ソシュール Ferdinand de Saussure (1857-1913、瑞、スイス)

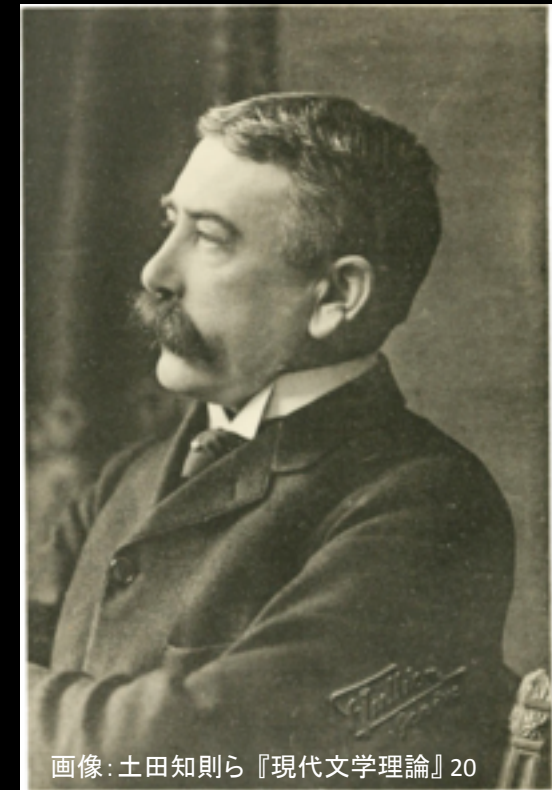
※ 配布資料参照

- ・ 「言語のシステム全体を、
音の差異と 概念の差異 とが結びついたものと
みなすことができます。

実定的に与えられた概念などどこにもありませんし、
概念と別個に 決まった 聴覚記号もない のです。

ある概念の差異をある記号の差異とつきあわせることで
一見実定的な項に似たものを得ているのです」

(ソシュール『一般言語学講義:コンスタンタンのノート』 p.177)



画像: 土田知則ら『現代文学理論』20

主な参考文献・さらなる知識のために

石井宏 (2004) 『反音楽史：さらばベートーヴェン』 新潮社。

岡田暁生 (2005) 『西洋音楽史：「クラシック」の黄昏』 中公新書。

神林恒道 (1996) 『シェリングとその時代：ロマン主義美学の研究』 行路社。

高辻知義ら (1997) 『ヨーロッパ・ロマン主義を読み直す』 岩波書店。

松宮秀治 (2008) 『芸術崇拜の思想』 白水社。

三浦信一郎 (1999) 「ベートーヴェン神話の形成と支配：音楽における近代」、神林恒道ら編『芸術における近代』 ミネルヴァ書房。

吉田寛 (2002) 「E・T・A・ホフマンの音楽美学にみる歴史哲学的思考：器楽の美学はいかにして進歩的歴史観と結びついたのか」 『美学芸術学研究』 20、東京大学大学院人文社会科学研究科。

E・T・A・ホフマン (1810=1984) 「ベートーヴェン・第五交響曲」 鈴木潔訳 『無限への憧憬：ドイツ・ロマン派の思想と芸術』 国書刊行会。

E・バーク (1757 = 1999) 『崇高と美の観念の起源』 中野好之訳、みすず書房。

小田部胤久 (2009) 『西洋美学史』 東京大学出版会。

熊野純彦 (2006) 『西洋哲学史：近代から現代へ』 岩波新書。

村田誠一 (1999) 「近代の終焉? : 芸術的表現の可能性と限界」、神林恒道ら編『芸術における近代』
ミネルヴァ書房。

ヴィンケルマン (1755 = 1976) 『ギリシア美術模倣論』 澤柳大五郎訳、座右宝刊行会。

バトラー (1747 = 1984) 『芸術論』 山縣熙訳、近代美学双書。

国安洋 (1991) 『〈藝術〉の終焉』 春秋社

エドゥアルト・ハンスリック (1854=1960) 『音楽美論』 渡辺護訳、岩波文庫 青503-1。

カント (1790 = 1964) 『判断力批判 (上・下) 』 篠田秀雄訳、岩波文庫。

クレメント・グリーンバーグ (2005) 『グリーンバーグ批評選集』 藤枝晃弘訳、勁草書房。

佐々木健一 (1995) 「かたち」 『美学辞典』 東京大学出版会。

菅原教夫 (1992) 『やさしい美術：モダンとポストモダン』 読売新聞社。

三浦信一郎 (1999) 「ベートーヴェン神話の形成と支配：音楽における近代」、神林恒道ら
編 『芸術における近代』 ミネルヴァ書房。

沼野雄司 (2005) 『リゲティ、ベリオ、ブーレーズ』 音楽之友社。

以上